
「海の生き物を守る会」メールマガジン No. 57

2010.3.14 (日)



Association for Protection of Marine Communities (AMCo)

Homepage : <http://www7b.biglobe.ne.jp/~hiromuk/index.html>

「今月の海」 茨城県日立海岸

茨城県日立市の海岸は長い砂浜が続く鹿島海岸のもっとも北側にあり、所々に岩礁の岬を



配した景勝の地である。しかし、近年は急激な砂浜の消失が続いている。この浜も侵食防止のためのコンクリートブロックが、まるで万里の長城のごとく汀線を覆い尽くし、岬の

岩礁もコンクリートブロックで囲まれている。波による侵食を許したのは、他ならぬ人間が作ったダムや港湾なのだが。景観を損なうものは人間の愚かさの証拠。

(茨城県日立市の海岸にて 向井 宏撮影)

目次 「今月の海」 茨城県日立海岸

1. 海の生き物とその生息環境に関するニュース
2. 海の生き物を守る会の現在の活動と予定
3. 海の生き物に関する運動・行事・他の団体の情報
4. 新連載エッセイー海中散歩ー（第3話）

「乙姫の髪」横濱康継

5. 事務局便り
6. 編集後記
7. 「うみひろも」と「海の生き物を守る会」について

1、海の生き物とその生息環境に関するニュース

【国際】

●クロマグロの禁輸に前進 日本政府は不服従と表明

ワシントン条約で大西洋と地中海のクロマグロの国際取引を禁止すべきだというモナコの提案について、EUが提案に賛成する意向を示したのに続き、アメリカ政府も提案に賛成の方向であることが報じられた。日本政府は、クロマグロは取引を禁止する基準を満たしていないとして、提案に反対してきた。しかし、国際自然保護連合（IUCN）は、この海域のクロマグロの資源量を調査して、今月、クロマグロの個体数の著しい減少は明らかで、漁獲開始前の個体数の15%未満に減少していると推定し、禁止の基準を十分満たしているという見解をまとめた。これは、科学者が日本政府の見解を真っ向から否定したもので、13日からカタールで開かれる締約国会議で、クロマグロをワシントン条約の国際取引禁止動物に指定する方向で採決される可能性がさらに前進した。

これらの国際的な世論の動向に危機感を感じた日本政府は、クロマグロの全面禁輸が採択された場合、留保権を行使し決定に従わないとの姿勢を表明した。これに対し、ワシントン条約（事務局・ジュネーブ）のウィンステッカー事務局長は、「世界に非常に悪い印象を与える。日本は政治的に難しい立場に置かれるだろう」と強い不快感を表した。

日本政府はクロマグロの資源量の減少を認め、国際世論に協調しなければ、自ら孤立の道を進まざるを得なくなり、ますます日本の食糧を確保することが困難になるだろう。真の国益とはなにか、真剣に考える必要がある。

【全国】

●西平会員がエジンバラ公賞を受賞

本会会員で沖縄海洋博記念公園管理財団参与の西平守孝東北大学名誉教授が、日本学士院から今年のエジンバラ公賞を贈られることが決まった。エジンバラ公賞は、自然保護を推

進したイギリスのエジンバラ公を記念して作られた賞で、2年に1回自然保護や種の保全に寄与した研究者に贈られる。西平会員、おめでとうございます。



西平守孝 画

●鯨肉裁判で乗組員が「横領していない」と証言

グリーンピース・ジャパンの佐藤・鈴木両名が捕鯨船の乗組員らが鯨肉を不法に横領し山分けしている実態を暴露するために、青森県の宅配便倉庫から段ボール入りの鯨肉を差し押さえて検察に告訴した件を、逆に窃盗の疑いをかけて両名を逮捕した事件の公判が青森地裁でようやく始まり、弁護側が要求した元乗組員への証人尋問が行われた。元乗組員は、鯨肉の横領はしていないと証言した。今回は、横領を内部告発した元乗組員の証人尋問が行われる予定。

【関東】

●鎌倉でもアカモクを食卓に

浅い海底の岩礁地帯に藻場を形成するアカモクは、日本海側の一部で地元消費されているが、最近各地でアカモクを健康食品として商品化する動きがでてきている。地域おこしの一環としてこれまで厄介者と思われていなかった海藻を見直そうというわけだが、神奈川県内では三浦市内の漁師が特産化を始めており、鎌倉でもそれにならって商品化が取り組まれることになった。

【北陸】

●新潟で海岸の地盤沈下 年間2・6センチ

新潟県は毎年、新潟市、上越市、南魚沼市の3市の水準点60～250ヶ所で地盤の沈下量を測定しているが、2009年度の地盤沈下状況を発表した。それによると、新潟市の海岸付近

で沈下量が 2.6cm と最大であった。この沈下量は前年の 1.5cm よりも大きい。県の報告では、「理由は不明だが、海岸部で毎年 1cm 以上沈下する傾向が 10 年以上も続いている」としており、監視を続けている。

【東海】

●西浦海岸で潮干狩り解禁

愛知県蒲郡市の西浦海岸で 3 月 1 日、潮干狩りが解禁になった。折りからチリ地震の津波警報が出ていたが、それも解除となり近隣の市民が潮干狩りに繰り出した。春が近く、大潮の干出が大きくなる時期を控えて、海に出かけるのが楽しみな季節がやってきた。愛知県内の水神地区、三谷温泉海岸、大島、形原海岸、竹島海岸などでも順次解禁される。

日本の多くの海で、潮干狩りが禁止され、解禁された時期だけしか潮干狩りができなくなったのは何故だろうか。コモンズ（入会権）の海がいつのまにか誰かの所有物になり利権が生じてしまった。

●コンビナートの海にロボットのウミガメ

三重県四日市市の磯津漁港で、ウミガメのロボットが子供たちに披露された。作ったのは「四日市ウミガメ保存会」で、ウミガメのロボットは、建築廃材やウエットスーツの端切れを使って作られた。ロボット披露会には、親子連れなど 45 人が参加した。製作を指導した海洋生物のロボットを専門に製作している海洋楽研究所の林正道さんは、コンクリートに囲まれた海を泳ぐロボットを見ながら「（こんなところに）ウミガメがいるわけないと思わないで、海の命の尊さを感じて欲しい」と呼びかけた。かつてアカウミガメが産卵に訪れていた現場近くの吉崎海岸は、今ではコンクリートに囲まれて 2003 年以降は確認されていない。ロボットを作って「命の尊さを感じ」ることができるのだろうか。

【近畿】

●シャチを5億円で譲渡 太地町から名古屋港水族館へ

和歌山県太地町立くじらの博物館は、飼育しているシャチの「ナミ」を名古屋港水族館へ 5 億円で売却する方針を発表した。太地町からは 2003 年に名古屋港水族館へ雌の「クー」がレンタルされたが、2008 年に死亡したため、その後釜として「ナミ」が譲渡されることになったという。繁殖研究が目的とされるが、5 億円という高額の値段でもあり、しかも飼育年数が 23 年あり、推定年齢 26 歳という人間で言えば老人の「ナミ」の売却は、研究名目の利益目的の譲渡であろうと、動物保護団体から批判されている。

日本では飼育されているシャチは 8 頭。残り 7 頭のすべてが鴨川シーワールドで飼育されている。シャチは希少種で捕獲は原則禁止され、研究のためなら水産庁の許可を得て捕獲できる。水族館が展示のためではなく研究のためと称しているのは、新たな捕獲を目指しているからかもしれない。

●文里港 埋め立てたが買い手つかず

和歌山県田辺市は、市内の文里港の港湾整備事業で埋め立てた 1.8 ヘクタールの売却を、買い手が付かないためにあきらめて公園にすることにした。3 月の定例議会に公園整備事業費 4 億 1241 万円を提案した。公園には多目的広場やゴルフ場を作る計画だという。

港湾整備は 7 億円をかけて耐震岸壁の設置と災害時の緊急物資輸送基地を完成させるついでに、隣接する海を埋め立てて、売却益を得ようとしたものだが、逆にさらに市費をつぎ込むことになった。貴重な海を埋め立て、さらに税金を無駄遣いし、ゴルフ場をつくるという市のやり方は、過去の埋め立ての悪弊をなんら学習していないと言わざるを得ない。

●イルカ猟の映画「ザ・コーヴ」がアカデミー賞受賞

和歌山県太地町のイルカ猟を隠し撮りした記録映画「ザ・コーヴ」が、今年の第 82 回全米アカデミー賞の長編ドキュメンタリー部門賞を受賞した。「ザ・コーヴ」は海洋資源保護協会（OPS）の制作になるもので、「わんぱくフリッパー」に主演したリック・オバリーが出演し、彼が調教したイルカがストレスのために「自殺」したことを後悔して、イルカや鯨の捕獲・調教を止めるように説得する内容。主に、太地町で行われている年間 23000 頭にのぼるイルカの捕獲を糾弾している。この映画の主張するものは、（1）太地町は、表向きは「イルカの町」を謳っているが、実際は、年間 23000 頭ものイルカを捕獲し、殺している。（2）イルカを捕獲する方法は、イルカが超音波に敏感なことを利用したもので、漁船からイルカの嫌がる超音波を出し、それでイルカを追い詰めていって、逃げられないようにしてつかまえている。（3）そのイルカを 1000 万円以上の高額で世界中の水族館に売って商売している。（4）そのほかのイルカは、食肉用にして売っている。（5）食肉用のイルカは、一部は「鯨の肉」と虚偽の表示をしてスーパーなどに売りに出している。（6）イルカの体内には濃度の高い水銀が蓄積されているので、それを食することは人体に危険を及ぼす。

授賞式で監督は、「日本の人々に知らせることが目的」と述べた。たしかにわれわれは太地町や気仙沼市などで、どのくらいどのようにイルカが殺されているかは知らない。まず知ることから始めなければならないだろう。

【中四国】

●「原発よりも命の海を！」 上関埋め立て反対で 72 時間ハンスト決行

山口県上関町長島に計画されている上関原発の建設に反対して、祝島の漁業者とともに埋め立て工事を実力で阻んできた虹のカヤック隊の岡田和樹さんが、3 月 11 日から 72 時間のハンガーストライキと広島市の中国電力本社前で座り込みを行いました。詳しくは、岡田さんのブログを参照して下さい。<http://ameblo.jp/nonukes-hunst/page-1.html#main> 以下は、ハンストに際しての彼の宣言文です。ハンストには、九州や四国、近畿などからも賛同者

が駆けつけ、いっしょに座り込みを行った。夜はキャンドルウォークを行い、道行く人に「原発よりも命の海を」守るよう訴えた。

ハンガーストライキ宣言文

原発よりも命の海を！72時間ハンスト(断食)

岡田和樹

僕は瀬戸内海沿岸で生まれ育ちました。小さいころから美しい海辺があるのが当たり前でした。その海辺が見る見るうちに失われていくのを目の当たりにしてきました。そんな中、地元竹原市でハチの干潟が埋め立てられようとなりました。瀬戸内海の原風景ともいえるハチの干潟を何とか受け継ぎたいとの想いから、ハチの干潟調査隊を立ち上げて、地元の人たちと干潟の大切さを再認識し、観察会や署名活動などを行い、県や市に要請し埋め立ては中止になりました。今僕たちの世代が、ハチの干潟を受け継いで、さらに次の世代へ受け渡していこうとしています。

その同じ瀬戸内海の山口県上関町で中国電力が建設を進めている原子力発電所は、奇跡的に残されてきた瀬戸内海最後の楽園を壊します。悠々と泳ぎまわるスナメリたちの行き場がなくなります。それだけではなく放射性物質や温暖化の原因である大量の熱廃水を常に流し、瀬戸内海全域・日本全域にまで影響を与えていくことでしょう。ましてや、原爆の放射能によって傷ついたヒロシマから、原爆と同じエネルギーによって生みだされる電力を作ることを促進する中国電力は、僕たち広島県民との間に大きな溝を作ることです。原子力の平和利用はあり得ません。原子力と共存はできません。

そんな僕たちの声に中国電力は耳を傾けてくれません。昨年9月から半年にわたり、僕は建設予定地の海上でシーカヤックに乗って、地元の人たちや全国から集まった同じ思いの若者たちと原発反対の意思表示をしてきました。申し入れや協議を拒否された僕たちに残された方法は、現地での直接行動しかありませんでした。しかし、中国電力はそこでも強硬に工事を押し進めようとした。僕は昨年11月8日に中国電力の指示のもとに動いている下請け業者らに、無理やり押さえ付けられて暴力をふるわれました。その後、地元の祝島の人たちに助けられ緊急搬送され、5日間も入院をしました。中国電力はそのことに対して謝罪もしていません。

僕は、自分の将来のため・次の世代のため・日本の民主主義のため、そして現地の人たち・命の海のためにも原発がないほうがよいと思います。すぐに工事を中止して、別の方法を僕たち市民や、中国電力の消費者と模索する道を作るべきです。僕は一人の人間として、72時間のハンガーストライキを決意しました。これが今できる僕の最大限の意思表示です。

どうか、全国のみなさんも上関原発に思いをめぐらせて下さい。この行動にご理解とご協力をよろしくお願いいたします。

●大橋川改修を疑問視 超党派で議員視察

島根県の斐伊川・神戸川の3点セット治水事業を検証するために、超党派の国会議員でつくる「公共事業チェック議員の会」が視察に訪れ、島根県選出の亀井亜紀子議員らが事業概要の説明や地元関係者の意見を聞いた。視察後、会長の松野信夫議員は「大橋川改修事業は本当に必要なのか疑問が高まった」と述べた。

●「泳げる中海を取り戻す」子供たちが決意を表明

ラムサール条約登録湿地の中海の環境保全に取り組む団体の活動発表会が米子市水鳥公園で開かれ、「彦名校区環境を良くする会」などの住民団体に所属する子供たちによる水質調査の活動や、リサイクル事業の紹介などが行われ、子供たちから「かならず泳げる中海を取り戻す」と決意が表明された。この催しは今年で3回目。

●サンゴ週間で乗船料を割り引き 愛南町

愛媛県愛南町が3月5日から11日までを「宇和海海中公園サンゴ週間」と名付け、町営の海中展望船の乗船料を割り引き運行した。同町鹿島周辺は宇和海海中公園に指定され、愛媛県最大のサンゴの群生地、近年サンゴの群生が拡大している。

●オニヒトテの被害が拡大

高知県土佐清水から愛媛県愛南町にかけての足摺宇和海のサンゴ群生地周辺で、オニヒトテが大量発生しており、珊瑚が食われる被害が拡大している。地元自治体やダイビング業者らは、このままでは3~4年でサンゴが全滅するのではないかと心配して、駆除作業を連携して取り組んでいる。

【九州】

●開門協議が難航 与党検討委員会が会合 長崎県知事は反対を表明

長崎県諫早市の国営諫早干拓事業における潮受け堤防開門の是非を検討する与党の検討委員会が初会合を開いたが、開門に反対している長崎県選出の民主党の西岡武夫参議院議員は、慎重に進めるように牽制した。与党の中でも賛否が分かれており、諮問した赤松農水相は、「ゼロベースで地元から意見を聞く」「検討委員会の結論は私の結論」として、当初2ヶ月くらいの間に結論を出すとしていたのを、参議院選挙の後になっても構わないと姿勢を変化させた。

それとは別に長崎県の中村法道知事は、郡司彰農水副大臣を訪ね、知事選挙後初めて公に開門に反対する姿勢を明らかにした。検討委員会の座長を務める郡司副大臣は、あらためて検討委員会として長崎県知事に意見を聞きたいと述べるにとどまった。検討委員会では3月16日に開門を求めている佐賀県の古川康知事から意見を聞くことになっている。

●熊本県内のアサリ8割減 ホトトギスガイが増加

熊本県のアサリ漁獲量が2009年に前年よりも約8割減少したことが県水産部の調べで判明した。熊本県水産研究センターでは、有明海や八代海でアサリの生息する砂地に生息しているホトトギスガイが増加したことが原因だとしている。また、近年台風の接近が少なく、泥が溜まり、ホトトギスガイが増加したとしている。これまで同様の現象には、地元漁協や県水産部が海底に砂を撒くなどの対策を行っていたが、環境問題への配慮から海砂の採取や散布が制限されるなどの影響で砂の値段が高騰し、対策事業が十分できないが、2010

年度には 3 億 6 千万円の費用をつぎ込むとしている。水産研究センターの研究者は「それよりも休業などの資源管理を徹底させることが重要」と指摘している。

●桜島の火山灰でサンゴが白化

昨年来、鹿児島県鹿児島市の桜島の火山噴火で大量の降灰がおき、鹿児島湾に生息しているサンゴが白化し、衰弱して死ぬという被害が広がっている。灰がサンゴ群体に直接積もって影響を与えると見られ、皿状のサンゴのカワラサンゴやスリバチサンゴなどの被害が目立っているという。灰が群体に積もると、光が透過できなくなり、共生藻類を持つサンゴは光合成ができずに白化し、死亡する。サンゴの被害が目立ち始めたのは、桜島の噴火が頻発し始めた昨年 10 月頃だという。

【沖縄】

●シュワブ陸上か津堅島周辺 首相、普天間移設で決断か

沖縄県米軍の普天間飛行場の移設先候補地について、鳩山首相は検討委員会の結論を待たず、ほぼ辺野古のシュワブ陸上案か米軍ホワイトビーチから津賢島までの間を埋め立てる案を軸に、米側との交渉に入る腹を固めたと見られる。鳩山首相は平野官房長官からそれぞれの案の説明を受け、決断したらしい。もともと、アメリカ側は辺野古沖の案にこだわっており、県外・国外が望ましいとしていた首相のこれまでの言動から沖縄県民が反発するのは当然で、調整は困難と思われる。アメリカは、新基地が建設されれば、数年以内に垂直離着陸輸送機オスプレーを配備する計画なので 1600m の滑走路が必要なため、シュワブ陸上案では計画が実行できないとしている。

また、津賢島までの海の埋め立てでは、あらたな環境破壊が起こる。沖縄県民は許さないだろう。これまで辺野古沖基地建設方針が決定してから 10 年以上、自公政権でも基地建設に着手できなかった。辺野古反対を公約にして自公議員を沖縄から無くしてしまった民主党政権が公約違反を行うなら、おそらく永久に基地を作ることはできないだろう。

●泡瀬干潟を埋め立ててスポーツ施設建設 沖縄市が新案提出

沖縄県の泡瀬干潟を埋め立てて人工島を作る計画が、経済合理性がないとして公金支出差し止めが福岡高等裁判所那覇支部で認められたが、沖縄市では、人工島造成によってスポーツ施設を中心とした土地利用計画案を新しく作成、最終的な案をまとめ、国に提出する。最終案は「スポーツを中心とした健康作り」をテーマに、競技場や体育館、プールなどの施設 16 ヘクタールと医療施設 8 ヘクタールを整備し、さらにリゾートホテルや商業施設を誘致する計画で、総事業費は約 1050 億円とされる。しかし、実際に企業誘致ができるかどうかなどは不明のままで、前原国交相が経済合理性などをどう判断するかが注目される。貴重な海を埋め立てて、プールを作り「健康作り」とは。

2. 海の生き物を守る会 現在の活動と予定

全国の砂浜海岸生物調査にご協力下さい

「海の生き物を守る会」では、全国の砂浜海岸生物調査を一般の人の参加を求めて実施しています。多くの方が、多くの海岸でこの調査に参加していただけるようお願いいたします。ご協力いただける方には、方法と調査報告用紙をメールでお送りいたします。当会のホームページ <http://www7b.biglobe.ne.jp/~hiromuk/index.html> にも掲載しています。

これまでに会員や非会員のみなさまから寄せられた調査票は63枚、全国42ヶ所の砂浜で調査が行われました。日本全国の砂浜調査にするには、まだまだ多くの海岸で調査が必要です。最低各県で2-3ヶ所の砂浜を調査し、全国で100ヶ所以上を目指しています。ぜひともみなさまのご協力をお願いします。これまで調査された砂浜の都道府県は以下の通りです。

北海道、青森県、神奈川県、千葉県、三重県、和歌山県、福井県、京都府、大阪府、兵庫県、香川県、徳島県、高知県、山口県、福岡県、沖縄県

3. 海の生き物に関する運動・行事・他の団体の情報

【関東】

● OWSネイチャーガイドトレーニングコース 参加者募集

恒例のOWSネイチャーガイドトレーニングコースを開催します。ネイチャーツアーにおけるフィールドでの自然解説や、自然観察指導を行うプロのネイチャーガイドの養成コースです。

期間 2010年3月19日～3月22日（国内コアコースの開催）

場所 国内コアコース：三浦半島

海外インターンコース：ミクロネシア・パラオ

⇒ <http://www.ows-npo.org/activity/ntc/index.html>

● ぶんぶん通信②上映会

とき：3月14日(日) 開場 11:30 開演 12:00

*A SEED JAPAN メンバーによる祝島訪問レポートトーク 有

料金：1000円（1ドリンク別）

ところ：代官山 「晴れたら空に豆まいて」 ○キネマれんず豆● 〒150-0034 渋谷区

代官山町 20-20 モンシェリー代官山 B2 TEL : 03-5456-8880 www.mameromantic.com

ご予約 : ticket@mameromantic.com

主催 : 【A SEED JAPAN】 <http://www.aseed.org/>

【東海】

● 「Marine and Coastal Biodiversity」 講演会

日時 : 2010年4月17日(土) 13:30~16:00

場所 : 豊橋科学技術大学 A101 講義室

講演 : 「海岸の生物多様性

沿岸の生態系サービスと砂浜」

講師 : 須田有輔 (水産大学校教授)

主催 : 豊橋科学技術大学、県境を跨ぐエコ地域づくり戦略プラン研究会、NPO 表浜ネットワーク

【近畿】

● ぶんぶん通信no.2 上映会

【日時】 3月19日(金) 19時-21時

【内容】 薪ストーブと焼き芋であったまる。
エコ満載の手作り空間で、懐かしい
未来につながる暮らしとエネルギーについて、
映像を観て、語って、五感で感じよう。

【会場】 エコロジー・ラボ (大阪市福島区吉野4-17-11)

<http://www.geocities.jp/yume2000oo/index.htm>

夢設計建築事務所 06-6463-4455

薪ストーブ 漆喰 竹 土間・・・エコ満載のスペース☆

【定員】 15名

【参加費】 800円 (お茶、お菓子付)

【主催】 rainbow☆planet

【問合せ&申込】 rainbowplanet@y7.net

● ぶんぶん通信no.3 上映会

【日時】 3月26日(金) 19時-21時

【内容】 薪ストーブと焼き芋であったまる。
エコ満載の手作り空間で、懐かしい
未来につながる暮らしとエネルギーについて、
映像を観て、語って、五感で感じよう。

【会場】 エコロジー・ラボ (大阪市福島区吉野4-17-11)
<http://www.geocities.jp/yume2000oo/index.htm>
夢設計建築事務所 06-6463-4455
薪ストーブ 漆喰 竹 土間・・・エコ満載のスペース☆

【定員】 15名
【参加費】 800円 (お茶、お菓子付)
【主催】 rainbow☆planet
【問合せ&申込】 rainbowplanet@y7.net

● **ぶんぶん通信no.1を観て、エネルギーシフトについて 話し合います。**

【開催日時】 3月16日 (火) 13:30-15:30 (13:00OPEN)
【会場】 コミュニティ・スペースななし (神戸市北区有野台3-8-13)
【参加費】 1000円 (みどり関西会員の方は 800円)
【主催】 みどり関西
【お問合せ先】 namiho4@gmail.com 当日携帯090-8528-2507 (松本)

● **ぶんぶん通信no.2を観て、エネルギーシフトについて 話し合います。**

【開催日時】 3月24日 (水) 13:30-15:30 (13:00OPEN)
【会場】 コミュニティ・スペースななし (神戸市北区有野台3-8-13)
【参加費】 1000円 (みどり関西会員の方は800円)
【主催】 みどり関西
【お問合せ先】 namiho4@gmail.com 当日携帯090-8528-2507 (松本)

● **ぶんぶん通信no.3 上映会**

【開催日時】 3月26日 (金) 17:50～
【会場】 阪南中央病院・講義室
大阪府松原市南新町3-3-28
近鉄南大阪線「布忍 (ぬのせ)」駅下車 徒歩8分
【参加費】 500円
【主催】 「六ヶ所村ラプソディー」を上映する会 in 阪南中央病院
【問合せ先】 rhapsody.hannan@gmail.com tel/fax:072-331-1919

● **『ぶんぶん通信NO.2上映会×わをんLIVE』**

【開催日時】 3月27日 (土)
16:30 オープン
17:00～ STOP! 上関原発上映

17:30～ ぶんぶん通信no.2 上映

18:30～ わをん ライブ

【参加費】 1000円 (祝島のびわ茶つき)

【会場】 FARMHOUSE CAFE <http://farmhouse-cafe.com>

【問い合わせ】 078.453.9355 (まさき)

【連携イベント】 布メッセージ作り

★ライブもあるよ 音であそぼう

西アフリカの木琴「バラフォン」と、ジャマイカの太鼓「ケテドラム」、他にもいろんな国の楽器があつまった ユニット「わをん」のライブです セッションタイムもあります みんなで音の「わ」をつくりましょう♪ 楽器 (あまり大きい音じゃないもの) を持っている方はぜひ連れてきてね。

● 「祝星・ホクレア号、祝島へ」&「ぶんぶん通信 No.3」 上映会 with 富田貴史 & 山口ハル

【開催日時】 3月28日 (日) 15:30開場 16:00上映 スタート

【会場】 Solar Gallery Cafe Shop LOTUSROOTS

〒530-0047 大阪市北区西天満3丁目3-4

(京阪・地下鉄堺筋線「北浜」駅 26番出口 徒歩5分、地下鉄谷町線
「南森町」駅/JR東西線「大阪天満宮」駅2番出口 徒歩10分)

<http://www.lotusroots.org/>

【参加費】 ¥1000 (上映会&トーク参加費)

+ ¥500 (祝島のびわ茶+祝島の素材入りおやつ)

定員・・・40名

ベジタリアンフード、ドリンク、スイーツもご注文頂けます。

【主催】 Solar Gallery Cafe Shop LOTUSROOTS

【お問い合わせ】 LOTUSROOTS (06-6131-1553)

● 「ぶんぶん通信no.1」上映会&トーク&ライブ

【会場】 ナチュラルフード・ヴィレッジ

京都府京都市左京区一乗寺築田町95 第一メゾン白川202

【開催日時】 3月30日 (火)

19:30オープン

20:00~21:45 「ぶんぶん通信no.1」上映

上映終了後、富田貴史トーク、ライブあり

23:00終了

【参加費】 1200円+1オーダー

【お問合せ先】 ナチュラルフード・ヴィレッジ 075-712-3372

● **ぶんぶん通信no.3を観て、エネルギーシフトについて話し合います**

【開催日時】 3月31日(水) 13:30-15:30 (13:00OPEN)

【会場】 コミュニティ・スペースななし
(神戸市北区有野台3-8-13)

【参加費】 1000円 (みどり関西会員の方は800円)

【主催】 みどり関西

【お問合せ先】 namiho4@gmail.com 当日携帯090-8528-2507 (松本)

【中四国】

● **スナメリウォッチングと春の海岸クリアップ**

【とき】 4月 4日(日) 10:00~15:00

【集合】 たつの市御津町岩見 魚市場

【持参するもの】 弁当・お茶・軍手・防止・火バサミ、ほか

【申込み】 3月31日(水)まで電話化FAXで下記までご連絡を

【参加費】 クルージング=2,000円

【連絡先】 : 播磨灘を守る会 Tel 079-322-0224 fax 079-322-8855

4. 新連載エッセイー海中散歩ー

(第三話) 乙姫の髪

横濱康継 (南三陸町自然環境活用センター長)

海中散歩 第一話 「乙姫の髪」

「りゅうぐうのおとひめのもとゆいのきりはずし」つまり「竜宮の乙姫の元結いの切り外し」という意味になるこの言葉は、海中に生育するある植物の異名とされ、最も長い植物名としても知られている。

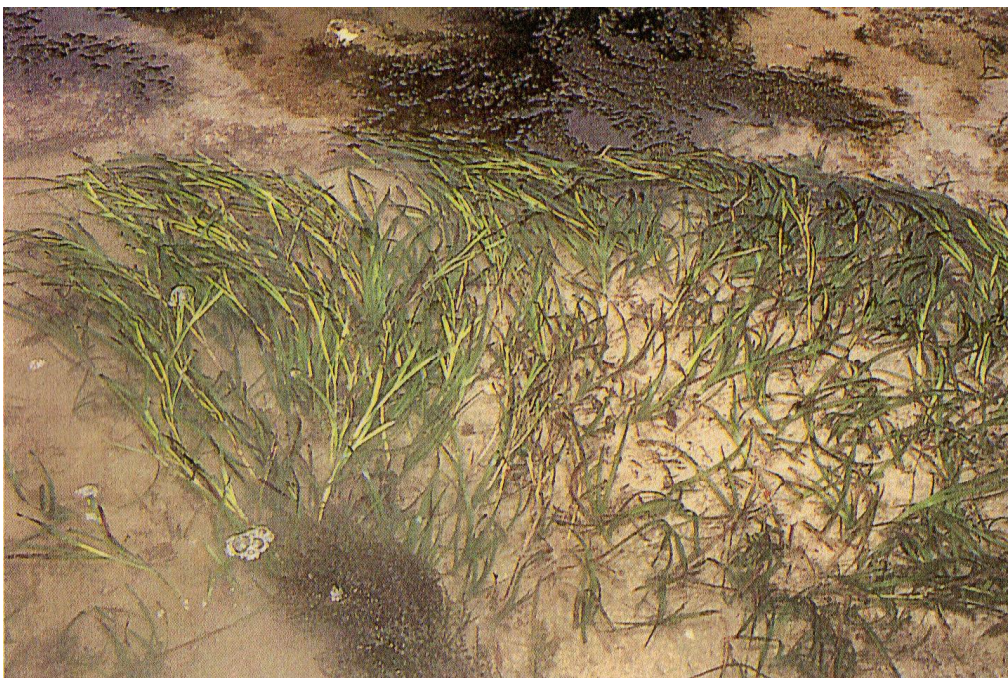
海中を散歩しながら出会いたい人物はもちろん乙姫様である。その「元結いの切り外し」

という意味の名を持つ植物とは？・・・と期待したいところだが、この異名の主は、アマモという内湾や河口域の砂泥質の海底という、あまり美しくない場所に生える海草（うみくさ）の一種とされている。

アマモという植物名は「甘藻」に由来するが、この植物は「味藻」とも呼ばれ、また干してから積み重ねて海水を注いで焼くという製塩に利用されたため、「藻塩草」という名でも親しまれてきた。甘藻・味藻・藻塩草という古来の植物名のいずれにも「藻」という文字が使われ、また植物学者が標準和名としたアマモの「モ」も「藻」に由来しているはずだが、植物学的にはアマモは「藻」ではない。しかし「藻」という文字はもともと「水中に生える植物」を意味していたため、植物学的に「藻」が定義されるまでは、アマモも「藻」だったのである。

植物学的な「藻」とは、「酸素の発生するタイプの光合成を営む植物からコケ植物・シダ植物・種子植物を除いたもの」というあまりにも漠然とした定義になってしまうが、カキなどの餌になるマイクロな植物プランクトンからワカメなどの海藻までを含む植物の仲間と表現すれば、イメージが湧くだろうか。

アマモは「藻」には入らない三つの仲間（陸上植物）のうちの種子植物に属するのだが、約四億五千万年前に上陸した緑色のマイクロな藻からコケ植物・シダ植物を経て出現した仲間が種子植物なのである。アマモは陸上の環境に最も適応したはずの仲間には属していなが



↑図1 浅所にも見られるアマモの群落

ら海の底に生育している植物ということになる。つまりアマモは約四億五千万年前の故郷である海へ里帰りした植物と言える。その里帰りの時期は今から五千万年前頃だったらしいのだが、私たちの感覚では、せつかく陸上での生活に便利な根や茎を発達させ、乾いた

空気中での雌雄の出会いも可能にする花という生殖器官まで持つようになったのに、なぜ海へ戻ってしまったのだろう、と不思議に思ってしまう。

「あまのじゃく」という形容がびっぴりの植物と言えそうだが、同じような「あまのじゃく植物」は世界中で六〇種ほどが知られているという。これは専門家にとっても意外に少ない種数に思えるのだが、やはり「あまのじゃく」はどの世界でも希少なのだろう。私たち人類の属する哺乳類も植物より一億年ほど遅れて上陸した魚の子孫なのだが、この仲間の中で海へ里帰りした「あまのじゃく」がイルカやクジラなどである。

イルカやクジラは海産哺乳類そして海獣とも呼ばれる。アマモなどは海産種子植物と呼ばれ、そして専門家は海草とも呼ぶが、「うみくさ」と発音して海藻とはっきり区別するようにしている。しかし国語としての海草は「かいそう」とも発音され、ワカメなどの海藻からアマモなどの海産種子植物までを含む「海中に生育する藻や草の総称」とされている。つまり海草がワカメなどの海藻も含んでしまうことになるわけで、このままでは学校教育の現場でも「海草」という文字の意味が国語と理科で異なることになりかねず、入学試験などで混乱が起こることさえ懸念される。私の例を引くのは少し気がひけるが、二〇〇五年度の北海道立高校の入試問題に小著の新潮選書「海の森の物語」から二頁ほどが使われたという。それも理科ではなく国語ということなので、かなり心配してしまった。

息子さんが受験したという教え子から送られた北海道新聞の紙面で、使用された部分に「海草」という文字のないことを確認して一応安心したのだが、問題を解いてみようという気にはなれなかった。もし私の解答が紙面に示されている模範解答と違ってしまったらどうしよう、などという臆病風にも吹かれ、未だに一間も解かないままである。ただ使用されたのは「月と太陽が描いた抽象画」という私自身最も気に入っている節の一部だったので、非常に嬉しく思い、「俺もエッセイストとして通用するようになったか」などと自惚れたのだが、丁度そのころ出版社から、その本の絶版が決まったという通知を受けた。あまり「売れない」というのが最大の理由だったらしい。

「月と太陽が描いた抽象画」とは、月と太陽の引力で起こる潮の満ち引きによって磯の斜面にさまざまな海藻の横縞模様が描かれるという話で、潮の満ち引きする標高差二メートルほどの潮間帯という部分における上下方向の海藻の移り変わりは、陸上の低地から高山へかけての標高差二千ないし三千メートルの範囲における植物の移り変わりに匹敵し、そのため潮の引いた磯に立つ私たちは身長二メートルほどの巨人になった気分を味わえる、という壮大(?)な内容である。この話も「海中散歩」にふさわしいので、いずれ登場することになるだろう。

さて、「あまのじゃくな植物」たちはなぜ海へ里帰りしたのだろう、という疑問が残されたままだが、実際にアマモなどの海草(うみくさ)たちの生育している現場を訪れてみると、その理由がわかる。

アマモは波の静かな湾奥や漁港内の砂泥質の海底に生育している。海底に生育する植物のほとんどは海藻なのだが、海藻は土壤中に張る「根」という器官を持たないため、砂地

や砂泥地には生育できず、岩や固い人工物に付着して生育している。そのため海底の砂地や砂泥地は空き地になっていたのだが、そのような空き地の一角に進出したのが海草なのである。

約四億五千年前に上陸した緑色の藻は、まずコケに進化した。この段階では根と呼べる器官を持たなかった。コケも体を固定しながら土壌中の水や養分を吸収する役割の細かな根のようなものをたくさん延ばすが、それらは表皮細胞の突起や細胞が一行につながっただけのものなので、根ではなく仮根（かこん）と呼ばれる。シダに進化した段階で、水や養分の通路としての「維管束」の通った根や茎が発達したのだが、シダから進化した種子植物はもちろん立派な根や茎を持っている。

海藻は全身で海水中の水や養分を吸収できるのだが、上陸してからの植物にとって利用できる水や養分はほとんど地中にしかない。そのために維管束という水や養分の通路を備えた巨大な根および根と葉をつなぐ茎が発達したのだが、地中に広く深く張った根は地上部を支える役目も果たしている。

海草も種子植物なので根を持っている。地中に張って地上部を支えることのできる根を利用して、根を持たない海藻たちの住めない砂泥地という空き地に、海草たちは住み始めたわけなのだが、彼らは茎も地中を水平に這う「地下茎」という形にし、これを縦横にのばして、海中ではかなり不安定といえる砂泥地にしがみついている。



↑ 図2 単子葉植物アマモ科のアマモ (*Zostera marina* L.)

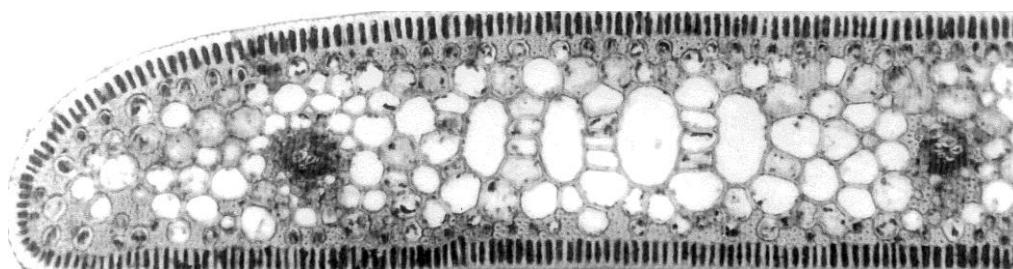
地下茎は水平方向に成長しながら所々から新芽を出すので、海底から立ち上がった何本もの植物体は地下でつながった形になっている。そして無数の地下茎が縦横に走っている

ため、波に洗われやすい砂泥地でも、海草は豊かな茂みを形成することができるのである。

ただ地下茎と根で不安定な砂泥地にしがみつこうにして生育する海草は、湾奥や港内のような外洋からの荒波の影響を受けにくい場所でなければ茂みを維持できない。そのような波静かな砂泥地に発達したアマモなどの茂みは、陸上のススキなどの茂みとよく似ている。「海の森」ならぬ「海の草原」なのだが、「乙姫の元結いの切り外し」という雰囲気は全く感じられない。

もしススキの大草原を強い風が吹き渡る光景を遠望したならば、それは髪の毛のそよぎを彷彿とさせるだろうが、アマモの茂みを強い波が襲ったら、海水は泥濁りの状態になり、ススキよりはるかに軟弱なアマモの葉はちぎれて水面に浮いてさまようという、惨憺たる状態になる。実際に荒れたあとの海岸にはアマモの葉の切れ端が多量に打ち上がるのだが、これを「乙姫の元結いの切り外し」と試してみようとしても悲しくなるだけである。

ちなみに、アマモの葉の切れ端が水面に浮くのは、海草の葉には空気の通路があり、その中に空気が溜まっているためである。アマモなどの葉は、ススキの葉のように空気中で立てることはできないが、水中では立っている。これは葉の中の空気の通路に溜まった空気の浮力に支えられているからで、そのため葉がちぎれると浮き上がることになる。試しにアマモの葉をちぎって水中でしごと、葉の切り口から出る細かな泡を肉眼でも確認できる。



↑図3 アマモの葉の横断面

葉の中の空気の通路は葉の光合成で発生した酸素の供給路としても役立っている。この通路は地下部にまでつながっているため、湾奥などの砂泥地という酸素不足に陥りやすい土壌中でも、地下茎や根が窒息を免れるばかりでなく、周辺の地中に住む微生物や小動物にも酸素が供給される。そのため「海の草原」は、酸素不足によるヘドロの発生を抑える役割を果たしていると言えるが、海草自身の働きと葉上で増殖する微生物の働きは海水も浄化している。さらに葉上の微生物は同じ葉上に住む小さなエビ・カニの仲間の餌になり、それらの小動物は草原を訪れる魚類の餌になる。また海草に卵を産み付ける魚介類も多いのである。

陸上の森や草原と同じように、海中の森や草原も、多様な生物にとって欠くことのできない存在であり、そして環境維持という重要な役割も果たしている。アマモの草原は、海中の最も汚れやすい領域で頑張っているというわけだが、それだけに残念ながら「竜宮の

乙姫の元結いの切り外し」という雰囲気にはほど遠い。それなのになぜ「りゅうぐうのおとひめのもとゆいのきりはずし」などという異名が付いたのだろう、という疑問が残る。

実は「あまのじゃく植物」である海草の中には、さらにあまのじゃくな種類が存在しているのである。海草は、陸上の環境に適した根と茎を使って、海藻の住めないまま空き地として残されていた砂泥地に住み込んだはずなのだが、スガモとエビアマモという海草は海藻が生育できるはずの岩の上に茂みを形成する。筆者の地元の志津川湾で見られるのはスガモのほうだが、荒い波の打ち寄せる場所の岩礁にしっかりと生えている。

スガモも根と茎を持っているが、茎は岩の上を這い、茎から出た根が岩に固着している。まるで海藻のマネをしているみたいだが、葉には海藻に見られない葉脈が走っているし、花も咲かせて種子も実らせる。ただ波の荒い場所に住むこの海草は、アマモなどより細くて丈夫な葉を持っている。そして緑色も濃くて艶もある。

潮が引くとスガモの茂みは水面に現れるが、密生した濃緑色の細長い葉が荒い波にもまれて前後左右としなやかに揺れる様子は、まさに元結いの切れた乙姫の髪を彷彿とさせる。いつの頃のことかわからないが、「竜宮の乙姫の元結いの切り外し」という名を付けた人の目を惹きつけたのは、アマモではなくスガモのほうだったはずだと私は確信した。



← 図4 海草としては例外的に岩礁上に生育するスガモ

ただ茨城県以南の沿岸にはスガモに代わってエビアマモが分布している。そして両種は外見上全く区別がつかないので、名付け親が茨城県以南に住む人であったら、「竜宮の乙姫の元結いの切り外し」はエビアマモだったことになるだろう。それにしても、このようなゆったりとした時の流れを感じさせる風流な植物名の名付け親とは、一体どんな人だったのだろうか。(第3話 完)

5. 事務局便り：

- このメールマガジンは、毎月1日と16日の2回発行の予定ですが、都合によって遅延や中止もあります。配信を希望する方、送りたい方がありましたらアドレスをお知らせください。また、パソコンを使えない環境の方には印刷体でもお届けします。その場合は、郵送料をご負担していただくことがあります。
- このメールマガジンは転載自由です。海の生き物に関心を持っている方に広く読んでいただくために転送をお願いします。ただし写真を別の目的で使用する場合は事前にご連絡ください。海の生き物や守る運動についての情報など、また各地で行われている海の生物の観察会、研修会、その他の行事に関する情報もお寄せください。「うみひろも」のバックナンバーは、ホームページからダウンロードできます。
- 本会は自然観察会や講演会を各地で実施しています。各地で開催を希望される方、開催をお手伝いできる方は、ご一報ください。また、各地の団体との共催も行います。ごいっしょに講演会や観察会をしたいと思われる団体からも提案をお受けします。
- 本会への寄付をお寄せください。寄付も会費も同じ銀行口座「ゆうちょ銀行 口座番号：10610-6673021 海の生き物を守る会」へ。

6. 編集後記

上関町長島田ノ浦の原発建設をめぐる情勢はかなり緊迫の度合いを強めている。鳩山政権が原発推進を掲げたことを受けて、中国電力は強気で事業を進めようとしているようだ。原発建設に反対した祝島の住民や、虹のカヤック隊の若ものなど実力で埋め立て工事を阻止した人たちを相手取って、巨額の損害賠償訴訟を起こしている。瀬戸内海の生き物にとって最後の砦と言われる周防灘東部の海がいま、風前の灯となっている。各地で長島の自然の大切さを訴える鎌仲ひとみ監督作品の「ぶんぶん通信」上映会が行われ、徐々に人々の関心が高くなってきている。瀬戸内海のような閉鎖性海域に本当に原発を作っても問題ないと思うのだろうか。海の生き物一般だけではなく、日本の漁業さえも危うくなる事態が起こると予想される。なんとかこの海と生き物を守りたい。(宏)

7. 「うみひろも」と「海の生き物を守る会」について

この「うみひろも」は「海の生き物を守る会」のメールマガジンです。配信が迷惑と思われる方は事務局までご連絡ください。

海の生き物を守るためになにかしたい！というあなたに！

会員募集中です！

会員は本会の趣旨に賛同できる個人・団体とします。会費は個人 2,000 円/年、団体 20,000

円／年。匿名による参加も可能です。会員は、当会の名前を使って各地で海の生物とその環境を保護・保全する活動を行うことができ、そのための助成金申請をすることができます。活動は当会の発行するメールマガジンなどを通して広く通知されます。入会希望の方は、事務局 hiromuk@mtf.biglobe.ne.jp（向井）まで、氏名、住所、メールアドレスをお知らせください。

メールマガジン『うみひろも』第57号 2010年3月14日発行

発行&編集人「海の生き物を守る会」代表 向井 宏

〒606-8244 京都市左京区北白川東平井町23-1 グリーンヒル北白川23

TEL&FAX:075-703-7205; 090-8563-1501 メールアドレス：hiromuk@mtf.biglobe.ne.jp

ホームページ URL：<http://www7b.biglobe.ne.jp/~hiromuk/index.html>

銀行口座：ゆうちょ銀行 口座番号：10610-6673021 海の生き物を守る会

